火星

平成二十一年五月一日発行（毎月1回1日発行）通巻八三二号
昭和二十五年四月三日第三種郵便物認可

平成二十一年五月号

七曜抄（七）

山尾玉藻

花桃をくぐりし男眠たがる

玄関に緋桃くぐりし靴ばかり

桃の家の奥に一荘（イーチャン）果てし声

眉つくりをれば桜が満開に

PDF= 俳誌の salon

夜の水のひたに沈める糸桜

椅子の背のショールにありし花疲れ

バッティングセンターの夜の桜かな

手焙りの寄せある廊の花あかり

鑑真和上春の日傘に手をひかれ

連翹の黄の吹つ切れてゐたりけり

PDF= 俳誌の salon

太白星

柳生千枝子

節分の声聞えくる星明かり

鮒挿しの整ひ兄の無口の歩

節分の夜の声父に似たる子の

長男の幼き力豆まかれ

今さらに母を恋ひをり豆をまく

隣家より幼き声や豆をまく

父母のこゑのきこゆる節分会

杉浦典子

鶏の小屋に来し鬼やらひけり

腹子もつわかさぎのまづ釣られけり

PDF= 俳誌の salon

春の湖すぎし気球の上昇す

瓦屋に瓦積まるる雨水かな

春潮の満ちくる島の朱の鳥居

春北斗湖に映れるもののなし

遠足の帽子イルカと握手せる

浜口高子

立春の一つ灯らぬシャンデリア

臘梅や足音もなく行乞僧

臘梅の一枝抱ふる夜の電車

鴨引きて電話ボックス灯りゐる

クレソンに添うて橋まで智恵詣

橋守に椅子ひとつあり噂れる

よくしやべる男に釣られたる公魚

PDF= 俳誌の salon

火星作品

山尾玉藻選

本堂に四角く座りあたたかし　大和郡山　城　孝子

うすらひの隙ひろげゐる金魚かな

おのが尻たたく馬の尾ねはん雪

永き日の水を見てゐる雄鹿かな

めん鶏の胸よごれゐる出開帳

先まはり先まはりして囀れる　宝塚　蘭定かず子

礼服の父に帰雁の空のあり

盆梅をめぐる畳のふかふかす

弁当の片寄つてをり芽吹山

うぐひすを聞く座布団を抱へきし

緑摘む池の干されてゐたりけり　山本　耀子

爪跡の樺（かんば）の高み雪解風

園の廊にせり出してゐる雛なり

PDF= 俳誌の salon

豆四五個沈みてゐたり春の雪

雪解川対岸は顔照らされて

暁の微熱に烟る白障子　八幡　坂口夫佐子

耳朶のぬくもつてきし針供養

紅梅の向う作務衣がガラス拭く

啓蟄の粗壁にあるコンセント

かげろへる梛の木に寄る緋の袴

薄氷の風の欠片となりにけり　明石　戸栗　末廣

うぐひすや肥やし袋の紐ゆるぶ

マンションの子の囲みゐる菊根分

かたくりの花に近づく声なりし

幼子の髪つややかに苜蓿

花菖蒲死後の景色を見にゆかむ　京都　白数　康弘

菖蒲田の上の墓山雨降れり

遠く来て婆は婆連れ菖蒲園

菖蒲園巡りて誰も足濡るる

ぬか雨の菖蒲は遠き海の色

PDF= 俳誌の salon

選のあとに

山尾　玉藻

めん鶏の胸よごれゐる出開帳　　城　孝子

本尊が留守の間は寺やその周辺に常とは違う雰囲気が漂うようである。仏の加護に頼られず落ちつかぬ思いになるからだろう。「めん鶏の胸よごれゐる」の些事に眼が止まったのも、そんな心理が働いたからである。ちょっとした具象を捉えて「出開帳」の趣を巧みに捉えた作品である。尚、おん鶏よりどこか身近に感じる「めん鶏」の方が句意に適っている。

先まはり先まはりして囀れる　　蘭定かず子

作者は広い公園か山辺の径を辿りながら、頭上より頻りに降る囀を楽しんでいるのである。歩いても歩いても囀が絶えることがない。無論、行く先々で違う鳥たちが囀っているのであるが、作者にはまるで同じ鳥たちが自分の「先まはり」をして鳴いて呉れているように思えたのだろう。「先まはり先まはり」のリフレインに、作者のこころの弾みが窺える。

雪解川対岸は顔照らされて　　山本　耀子

「雪解川」の対岸に立つ人の顔に日が当り、作者はそれを眩しく眺めている景である。ところで、「対岸の顔」とせず「対岸は顔」のはと断定したところに注目したい。このはの強いひびきで、逆に作者の立つこちら側の岸の日陰る様子や冷たさを強調しているのである。助詞の働きは大きい。

啓蟄の粗壁にあるコンセント　　坂口夫佐子

「啓蟄」「粗壁」「コンセント」に何の脈絡もないが、この三位が一つの俳句形式を取ると、忽ちに豊かなハーモニーを奏で始める。とは言え、言葉を綴って鑑賞するのは難しい。こういう作品は季節の手触り感を楽しめば良い。実は掲句が生まれた現場に私は居合わせた。田舎家風の部屋で吟行会をした折、私も同じ題材で何とか一句にしたかったが上手くいかなかった。清記が廻ってきて「やられたッ」と思った。

うすらひの風の欠片となりにけり　　戸栗　末廣

「うすらひ」の大方が解け、僅かに形をとどめながら風に揺らいでいたのである。その様子を「風の欠片」と描写してなかなか詩情性が高い。ちっぽけな存在となってしまった「うすらひ」に見事に実相観入している。俳句は存在の詩。

花菖蒲死後の景色を見にゆかむ　　白数　康弘

死後の世界に天国と地獄があるとすれば、菖蒲の群れ咲く様子はやはり天国の景と言えるであろう。菖蒲園を巡ろうとして、「死後の景色を見にゆかむ」とちょっと眩いてみた作者なのである。この眩き言は独り善がり的ではあるのだが、静麗な「花菖蒲」がそれを感じさせない。例えば、「花蓮」「桜」「牡丹」なら観念臭がして失敗作となったことだろう。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon

恒星圏

同人Ⅰ

米澤光子

春の霜踏むだけ踏んで泣き止みぬ
余寒なほ張子の耳の真くれなゐ
ベル押して郵便夫の来し春の雪
春泥や検針員の靴のあと
恋猫の背ナを平らに出てゆきぬ

山田美恵子

雛の日の一輪草の玉雫
浅春や切り出しの竹地を擦れる
雪解けの誰の墓なる風車
縄跳びの上手も下手も霞みをり
父の忌の梅咲き始むる家並かな

蘭定かず子

天井に届く蔵書や冴返る
紅梅の枝をくぐり来しハンチング
末黒野をきらきらとゆく天気雨
まつくらな湖に雪降る雛かな
椋の樹の空ふかぶかと卒業期

山本耀子

母あらば佇ちゐる辛夷咲きにけり
花大根何度もつむり撫づ別れ
永き日や棚田の裾の波の音
放りある大根の葉に春の雪
日へ水へ傾ぎてゐたる蕗のたう

渡邉美保

立春や鷗の羽根に紅のいろ
きさらぎの泡立つ渚大没日
初蝶や漁具小屋の戸の開いてゐる
雛あられ食みて波音聞いてゐる
吸ふ息の鼻腔すぎゆく大寒波

PDF= 俳誌の salon

獅子座

山尾玉藻推薦

笠置早苗

甘樫の丘をまろびし春の雷
うすらひや獣のやうな鶏の脚
おおてらの甍を春日すべりけり
竹林に日矢のいくすぢ雛の日

垣岡暎子

のち雨と書き足す日誌お山焼
かたくりの驚くさまに群れゐたり
ほら貝の朱の紐褪せし寒の明
相生の松めぐりきし裘

涼野海音

耳飾りほどの冬芽に触れてみし
蓑虫の蓑脱いでゐる日曜日
触りたきものに鼬の尻尾かな
着ぶくれて船岡山へ登りけり

白数康弘

闇汁を闇にすすりて胸汚す
くらがりを仕切りし障子めくら汁
闇鍋を囲みて餓ゑを知らざりし
掬ひしは玉子ばかりやめくら汁

渡辺数子

紫の衣召されし春の霜
梅に鼻寄せ焼香の列につく
梅林に童女のごとく坐りゐる
へんくつな盆梅二百五十年

大城戸みさ子

三椏の花へ筧のし吹きけり
吉田山に追儺近づく木槌の音
風花や俥にサリーなびかせて
囀や仁王眉間の皺ふかく

伊勢きみこ

湖北より湖東へまはる春帽子
庫裡までの砂利音高し木瓜の花
水底の透けてひびくや彼岸西風
鷺ならび擁壁に佇つ春の昼

PDF= 俳誌の salon